

青年におけるアイデンティティ確立と SNSの利用および依存との因果関係の検討

久保 昌平¹⁾・坂田 桐子²⁾・清水 裕士³⁾

- 1) 日本郵便株式会社
- 2) 広島大学大学院総合科学研究科
- 3) 関西学院大学社会学部

An Examination of the Causal Relationship among Self-Identity Development, Using SNS and SNS Addiction

Shohei KUBO ¹⁾, Kiriko SAKATA ²⁾ and Hiroshi SHIMIZU ³⁾

- 1) JAPAN POST Co., Ltd.
- 2) Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University
- 3) School of Sociology, Kwansai Gakuin University

Abstract: The adolescent is the big turning point during the life. Adolescents must find positive answer for the question “what is with the quality of oneself” through interactions with neighboring people to develop SELF-IDENTITY. On the other hand, Social Network Services (SNS) are highly familiar to them, making “SNS addiction” become a big social problem. This study attempted causal relationship among self-identity development and using SNS, consequently SNS addiction, from the viewpoint of personal connections. A two-wave panel survey was conducted in April and July 2013. One hundred and thirty two Undergraduate students were requested to complete scales, which measures Identity development, loneliness, SNS addiction, the number of acquaintance in real life connected on SNS (real network size) and connected only on SNS (net-only network size). Results indicated that real network size significantly caused directly

Identity development while net-only network size did not. Moreover, for those who had huge real network size, Identity development was promoted as net-only network size was huge. These results suggest that only for those who have the abundant network in real life, it may be said that the relations only on SNS become meaningful for developing their own Identity. Furthermore, they can show knowledge of importance to cultivate network in real life at first to receive benefits of using SNS.

Keywords: Identity development, SNS addiction, Using SNS, Social ties

私たちが送る一生の中でも、10代後半を中心とした時期、すなわち青年期は人生の大きな分岐点の1つと言える。現代では、若年層のフリーターやニートの割合の増加や(内閣府, 2014)、離転職の繰り返し(白井, 2008)といった社会問題を背景

に、社会学や心理学の観点から常に関心が向けられている。この青年期特有の心理状態について、Erikson (1959)は、青年期の発達上の課題は「アイデンティティ」の獲得であり、これまでに得た自己像や知識を社会に位置づけながら、「自分の存在意義は何か」という疑問に対する確信的かつ肯定的な答えを出すことで初めて確立に成功するとした。

アイデンティティ確立と精神的健康との間の正の関連がこれまでに多数報告されている。例えば、アイデンティティ確立が進んでいる人ほど自尊心が高く(宮下, 1987; 谷, 2001), 人生の充実を感じており(谷, 2001), さらに、孤独感の低下との関連も報告されている(小林, 2007)。また、アイデンティティ確立を促す要因については、友人・両親・教師といった接触頻度の高い人物が特に重要であり(宮下・渡辺, 1992), 特に友人のサポートがアイデンティティ確立を正に予測した点(慶徳・森下, 2012)や、精神的な安らぎを与える友人を持っていると感じる人ほど確立が進んでいる点(宮下, 1998)から、主に対人関係、特に友人との接触・交流が重要であると言える。

一方で、SNS (Social Networking Service)の台頭により、時間や場所を問わない交流が盛んに行われている。SNSの利用率が10代では76.3%, 20代では91.0%と高い割合であり(情報通信政策研究所, 2014), 1日の利用時間が10代は162分, 20代では84分であることから(ソーシャルメディア・マーケティングセンター, 2013), 今や青年にとってSNSは不可欠なものとなっている。しかし、普及に伴い若年層の「SNS依存」も問題視されている。SNS依存者は非依存者よりも、情緒不安定またはひきこもりになったと有意に回答するなど(橋元, 2011), 依存による深刻な悪影響が懸念されている。

以上をまとめると、青年のアイデンティティ確立は対人関係に大きく影響され、その対人関係の構築・維持をSNSが大きく担っている。したがって、アイデンティティ確立とSNS利用との間にも何らかの関連があると考えられる。また、SNS利用とその依存との間にも密接な関係性があると予想されるので、アイデンティティ確立とSNS依

存との間の関連も見出せる可能性がある。しかし、SNS利用とアイデンティティ確立の関連を検討した研究は数に乏しく、その先行研究(e.g. 辻, 2004; Leung, 2011)も因果関係が明らかになっていないという問題がある。そこで本論文では、青年のアイデンティティ確立とSNS利用、およびSNS依存のそれぞれの因果関係について、利用における量的側面(e.g. リンクしているアカウントの数, 1日のアクセス回数)から探索的に検討する。

方法

調査対象者

質問紙調査を2度行い(Time 1: 2013年4月, Time 2: 同年7月), 双方に回答した国公立大学の学生132名(女性61名, $M_{age}=18.72$, $SD=0.87$)を分析対象にした。

測定尺度

(1) アイデンティティ確立の程度

アイデンティティ測定尺度(下山, 1992; 20項目)を使用した。「アイデンティティの基礎」および「アイデンティティの確立」の2因子から構成されるが、本研究では総合的なアイデンティティ確立の程度に焦点を当てるため、2因子をまとめた得点をアイデンティティ得点として用いた。評定の得点が高くなるほど、アイデンティティの基礎がより安定し確立が進んでいることを示す。

(2) 孤独感

改訂版UCLA孤独感尺度(諸井, 1992; 20項目)を使用した。日常生活の中で感じる孤独感がSNSの利用と大きく関連すると考えられるため、統制変数として用いた。評点の得点が高くなるほど、孤独を感じる傾向が強くなることを示す。

(3) SNSの利用実態

最初にSNSに該当するものを例示した後、いずれかのSNSにアカウントを登録しているかどうかを尋ねた。登録している場合は、最も頻繁に利用するSNSを8項目(twitter・Facebook・LINE・GREE・Mobage・Ameba・mixi・その他)の中から

1つ選び、それを想起しながら(3A)・(3B)に回答するよう教示した。いずれのSNSにも登録していない場合は、(3A)・(3B)には回答しなくてもよいことを教示した。

(3A) SNS利用に関する諸項目

想起したSNSの1日当たりのアクセス回数(0～10回, 11～20回, …51回以上, の6件法), およびアクションの総回数(以下, アクション回数; e.g. 相手にメッセージやリプライを送る, つぶやく, 日記や写真をアップする, いいね!を押す; アクセス回数と同様の6件法), SNS上で繋がっているアカウントの数, その中で実生活でも知り合いの人数(リアル・ネットワークサイズ; リアルNS)を尋ねた。また, SNS上で繋がっているが実生活では知り合いでない人の数(ネットオンリー・ネットワークサイズ; ネットOnlyNS)を, SNS上で繋がっているアカウントの数からリアルNSを差し引いて算出した。

(3B) SNS依存尺度(独自作成; 10項目)

携帯メール依存尺度(吉田ら, 2005)の中から, 因子負荷量が高い10項目をSNS利用について尋ねるのに適した項目になるよう, 社会心理学を専門にする教員1名, 院生2名と討議しながら文言を一部変更した。

結果

SNSを利用していると回答した人の割合はTime 1・Time 2ともに90%を超えていた(Time 1: 91.7%, Time 2: 91.1%)。最も頻繁に利用するSNSは, Time 1・Time 2ともにLINEが60%以上(Time 1: 67.5%, Time 2: 63.8%; 以下同様), twitterが30%前後(25.6%, 32.5%), Facebookが5%前後(6.1%, 3.7%)となった。

使用した尺度の因子構造の検討

SNS依存尺度の因子構造の検討にはTime 1に回答した174人を分析対象とした。探索的因子分析(最尤法, プロマックス回転)を実施し2因子解を採用した(Table 1)。第1因子はSNSでの対人関係の過剰な重要視や, SNS上の相手を気遣うことによる不安を示した因子であるため「情緒的利用」,

第2因子は利用するべきではない時間や場所でもSNSに興じることを反映する項目が含まれるため「過度の利用」と命名した。クロンバックの α 係数は第1因子でTime 1: $\alpha=.780$, Time 2: $\alpha=.719$, 第2因子でTime 1: $\alpha=.749$, Time 2: $\alpha=.782$ であり, 許容できる信頼性が確認された。

また, SNS依存尺度の妥当性を確認するため, アクセス回数およびアクション回数との相関を検討した。過度の利用は, 頻繁にSNSを利用することが項目内容から想定されるため, アクセス回数およびアクション回数との間に有意な正の相関があると考えられる。相関関係を検討したところ, Time 1・Time 2ともに, アクセス回数およびアクション回数との間に有意な正の相関が見られた(アクセス回数Time 1: $r=.51$, Time 2: $r=.36$, ともに $p<.01$; アクション回数Time 1: $r=.52$, Time 2: $r=.44$, ともに $p<.01$)。

一方, 情緒的利用は対人関係における不安を示す概念を反映しており, その不安はアクセスやアクションの衝動を駆り立てるだけでなく, それらを抑止する方向にも働くと考えられる。このことから, 情緒的利用とアクセス回数およびアクション回数との相関関係は, 過度の利用と比べ弱く留まると予測される。同様に検討した結果, アクセス回数との間には有意傾向の正の相関が確認され, アクション回数との間には有意な相関は見られなかった(アクセス回数Time 1: $r=.21$, $p<.05$, Time 2: $r=.16$, $p<.10$; アクション回数Time 1: $r=.11$, Time 2: $r=.10$, ともに $n.s.$)。以上より, SNS依存尺度の妥当性が確認された。

アイデンティティおよび孤独感とSNSに関する変数との相関

アイデンティティおよび孤独感, SNS依存尺度の下位2因子, SNS利用に関する量的変数の各相関を時点ごとにTable 2に示す。注目すべき結果として, Time 1・Time 2ともに, SNS依存の2因子のうち, 情緒的利用はアイデンティティと有意な負の相関, 孤独感とは有意な正の相関が認められたのに対し, 過度の利用は2変数と有意な相関関係は確認されなかった。また同様に, リアルNSはアイデンティティと有意な正の相関, 孤独感と

Table1 SNS依存尺度に対する因子分析の結果 (Time 1)

項目	因子負荷量		
	I	II	共通性
第1因子(I) 情緒的利用 ($\alpha=.780$)			
SNSでのやりとりがなくなると、人間関係も崩れてしまうように感じる	.78	-.15	.50
自分あてに誰からもリアクションがずっと来ないと不安になる	.72	.00	.51
自分が送った文章の量よりも、相手から返信される文章量が少ないと、不安になる	.63	.02	.41
SNSを使わないと、新しくできた友達との関係が保てない	.56	.09	.37
相手の本当の気持ちがそのままメッセージに表れているのかがわからなくて不安になることがある	.54	.07	.34
第2因子(II) 過度の利用 ($\alpha=.749$)			
一人になったときは、すぐに携帯電話を取り出して SNS のページにアクセスする	-.10	.82	.60
人と話しながらでも、SNS のページを開いていることがある	-.11	.70	.42
何時間も続けてメッセージのやりとりをすることがある	.11	.47	.29
メッセージを送った後には、返事が気になり何度も携帯電話(スマホを含む)やパソコンをチェックする	.27	.42	.36
暇なときは、とにかくメッセージを発信して誰かに相手にしてもらいたい	.26	.42	.35
因子間相関	.51		

Table2 アイデンティティ得点および孤独感とSNS依存2因子およびSNS利用の量的変数との時点ごとの各相関

Time1	情緒的利用	過度の利用	リアル NS	ネット OnlyNS
アイデンティティ	-.30 **	-.07	.29 **	-.05
孤独感	.17 *	-.03	-.32 **	.18 *
Time2	情緒的利用	過度の利用	リアル NS	ネット OnlyNS
アイデンティティ	-.23 **	-.08	.34 **	-.03
孤独感	.19 *	.02	-.27 **	.23 **

** $p < .01$, * $p < .05$

は有意な負の相関が認められた一方で、ネット OnlyNSは孤独感のみと有意な正の相関が確認された。

因果関係の検討

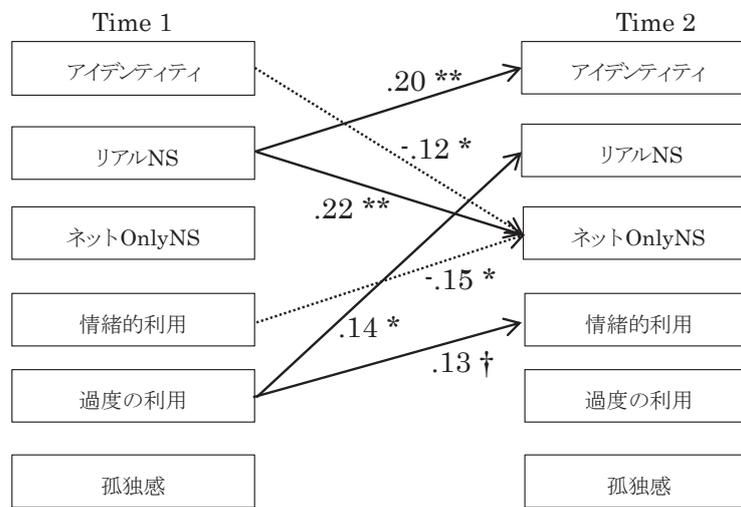
続いて因果関係を検討するために、孤独感を含めた6変数を用いたクロスラグドモデルによる分析を行った(Figure1)。主立った結果として、①リ

アルNSからアイデンティティ得点に有意な正のパスが引かれていること($\beta = .20$, $p < .05$)、②アイデンティティ得点からネット OnlyNSに有意な負のパスが引かれていること($\beta = -.12$, $p < .05$)、③過度の利用から情緒的利用に有意傾向の正のパスが引かれていること($\beta = .13$, $p < .10$)が挙げられる。

①より、リアルNSが大きいほどアイデンティ

ティ確立が進み、SNSのみの関わりを持つ人数はアイデンティティ確立に直接的な影響を及ぼさないことが示された。しかし、このSNS上の繋がりに関する2変数(リアルNSとネットOnlyNS)の交互作用がアイデンティティ確立に与える影響が示されていない。そこで、Time1での1日当たりのアクション回数およびアクセス回数をStep1、Time1でのリアルNSとネットOnlyNSをStep2、Step2に投入した2変数の交互作用をStep3に投入し、Time1からTime2の間で進んだアイデンティティ確立の程

度(Time2 - Time1)を従属変数とした階層的重回帰分析を実施したところ、Step3における交互作用が有意であった($\beta = .44, p < .05$; Table3)。さらに下位検定の結果をFigure2に示す。リアルNS高群におけるネットOnlyNSの単純主効果が見られたが($\beta = .69, p < .05$)、低群におけるネットOnlyNSの単純主効果は確認されなかった($\beta = -.13, n.s.$)。なお、投入したすべての変数のVIF (Variance Inflation Factor)は基準となる10.0を大きく下回っていたため、多重共線性は生じていないと言える。



(数値は標準化係数、共分散と残差係数は省略；
 両時点でも SNS を利用しており、かつ欠損値がないデータのみを使用；
 実線は正、点線は負の係数 ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$)
 $n=106$, CFI=.997, RMSEA=.028

Figure1 クロスラグドモデルによる因果関係の検討

Table3 リアルNSとネットOnlyNSがアイデンティティ得点差分値に与える影響

変数名	標準化回帰係数(β)		
	Step1	Step2	Step3
アクション回数	-.24	-.20	-.14
アクセス回数	.21 +	.19 +	.16
リアル NS		.23 *	.25 **
ネット OnlyNS		-.09	.28
リアル NS × ネット OnlyNS			.44 **
R ²	.04	.11 *	.15 **
Δ R ²	---	.07 *	.04 *

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

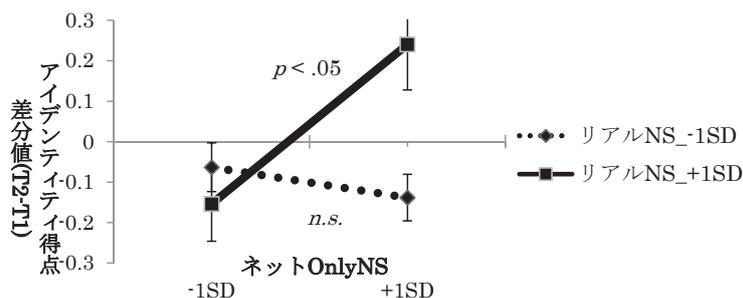


Figure2 リアルNSとネットOnlyNSの交互作用

考察

本研究では、アイデンティティ確立、SNS依存、SNS利用の量的側面の因果関係を探的に検討した。まず、SNS依存尺度に因子分析を行った結果、情緒的利用と過度の利用の2因子に分かれ、過去に流行したSNSのmixiを対象にした小寺(2009)と同様の結果となった。同時点において、情緒的利用はアイデンティティや孤独感との有意な相関関係が確認されたことから、SNSへの感情的な依存は総じて精神的な不健康と結びつくことが示され、危惧されるべきものであると言える。一方、過度の利用はアイデンティティや孤独感との有意な相関が見られず、精神的健康におけるデメリットとの関連はないと言えるが、因果関係の検討により、過度の利用が情緒的利用を喚起する傾向にあることが実証されたため、看過できない結果と言える。

次に、リアルNSが大きいほどアイデンティティ確立が促されること、その一方で、ネットOnlyNSが大きくても、アイデンティティ確立が直接促進されないことが示された。これについて、社会と繋がりのある感覚としての「連帯」がアイデンティティ確立に正の影響を与えるという先行研究(大野ら, 2004)より、対面上の付き合いがある相手とSNSでも繋がりをもつことで「連帯」をより実感し、アイデンティティ確立が促されるが、SNS上の浅く緩い繋がりのみでは連帯を感じられず、確立に直接的な影響を与えないことが考えられる。また、アイデンティティ確立が進んでいないほど、ネットOnlyNSが大きくなるという結果にも、同様の見解が当てはまる。つまり、アイデンティティ確立の要因である連帯を対面上のネット

ワークだけでは十分に得られていない場合に、SNSを介して新たな繋がりを希求した結果、オンラインのみの関わりを持つ人の数が増えたと考えられる。これらの結果は、Putnam (2000)がオンライン・コミュニケーションは対面上のコミュニケーションを補完するものであって、それ自体は社会的な繋がり(社会関係資本)に重要ではないとした点や、Kraut (1998)がインターネット上の弱い繋がりでは対面上の強い繋がりから得られるような心理的サポートを獲得できないと指摘した点と一致する。また、日常生活において周囲からのサポート受領が少ない母親ほどオンライン空間での心理的サポートを求めようとするという先行研究(Miyata, 2002)を全面的に支持するものでもある。

その一方で、リアルNSが大きい場合に、ネットOnlyNSも大きいほどアイデンティティ確立が促されることが実証された。これについて、現実生活における社会との関わりによって影響の方向性が変わること、すなわち日頃多くのサポートを得ている外交的なユーザーにはネット利用がポジティブに作用し、サポート不足で内向的なユーザーには家族や友人との関わりが減少するといった、ネガティブな影響を受けること(Rich-get-richer Model; Kraut et al., 2002)が、日本の青年のSNS利用においても当てはまると言える。つまり、対面での交流の量が潤沢なユーザーに限り、SNS上のみの関係も意義深いものになると言え、SNS利用の恩恵を受けるためには、まず対面ネットワークを培うことが大切であるという重要な知見を提示することができた。

最後に、本研究の課題を挙げる。1点目は、

SNS上の交流から得られる心理的効用とアイデンティティ確立との関連を検討していないことである。本研究ではSNS利用における量的側面を採りあげたが、SNSでの交流から得られる心理的効用の種類や程度については全く触れていない。SNS上の交流から得られる心理的効用の種類と程度を同定した上で、それらとアイデンティティ確立との関連を示す必要がある。2点目は、SNS利用に関する質問をする際、最も頻繁に利用するSNSを想起させたことである。その結果、LINEを回答した人が60%以上となったが、LINEは情報交換や事務連絡のために利用する人が多いため、本来はLINE以外のSNSに依存していても、その状態を浮き彫りにすることができない。今後は1つのSNSに偏らないよう質問紙の構成や教示に配慮することが必要になる。

引用文献

- Erikson, E. H. (1959). Identity and the life cycle: Selected papers. *Psychological Issues*. (エリクソン, E. H. (1959). 小此木啓吾訳(1973). 自我同一性 誠信書房)
- 橋元良明 (2011). ネット依存の現状—2010年調査 総務省・安心ネットづくり促進協議会共同研究報告書
- 慶徳めぐみ・森下正康 (2012). 青年期におけるアイデンティティ形成にソーシャル・サポートがおよぼす影響 京都女子大学発達教育学部紀要, **8**, 107-116.
- 小林邦雄 (2007). 大学生の「孤独感」と「アイデンティティ」の研究: 映画鑑賞と関連づけて 近畿大学生物理工学部紀要, **19**, 81-100.
- 小寺敦之 (2009). 若者のコミュニケーション空間の展開: SNS『mixi』の利用と満足, および携帯メール利用との関連性 情報通信学会誌, **27**, 55-66.
- Kraut, R., Patterson, M., Lundmark, V., Kiesler, S., Mukophadhyay, T., & Scherlis, W. (1998). Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being?. *American psychologist*, **53**, 1017-1031.
- Kraut, R., Kiesler, S., Boneva, B., Cummings, J., Helgeson, V., & Crawford, A. (2002). Internet paradox revisited. *Journal of social issues*, **58**, 49-74.
- Leung, L. (2011). Loneliness, social support, and preference for online social interaction: the mediating effects of identity experimentation online among children and adolescents. *Chinese Journal of Communication*, **4**, 381-399.
- Miyata, K. (2002). Social support for Japanese mothers online and offline. *The internet in everyday life*, 520-548.
- 宮下一博 (1987). Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, **35**, 253-258.
- 宮下一博, 渡辺朝子 (1992). 青年期における自我同一性と友人関係 千葉大学教育学部研究紀要, **40**, 107-111.
- 宮下一博 (1998). 青年の集団活動への関わり及び友人関係とアイデンティティ発達との関連 千葉大学教育学部研究紀要 I教育科学編, **46**, 27-34.
- 諸井克英 (1992). 改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討 静岡大学人文学部人文論集, **42**, 23-51.
- 内閣府 (2014). 平成26年版 子ども・若者白書 http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/pdf_index.html (2014年6月掲載, 2015年1月19日閲覧)
- 大野久・茂垣まどか・三好昭子・内島香絵 (2004). MIMICモデルによるアイデンティティの実感としての充実感の構造の検討 教育心理学研究, **52**, 320-330.
- Putnam, R. D. (2000). Bowling alone: The collapse and revival of American community. Simon and Schuster Paperbacks. (パットナム, R. D. (2000). 柴内康文訳 (2006). 孤独なボウリング: 米国コミュニティの崩壊と再生 柏書房)
- 下山晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究 教育心理学研究, **40**, 121-129.
- 白井利明 (2008). 現代社会における大人への移行の諸問題 北海道大学大学院教育学研究院紀要, **103**, 191-206.
- ソーシャルメディア・マーケティングセンター 「全国ソーシャルメディアユーザー 1000人調査」 <http://www.hakuhodo.co.jp/uploads/2013/05/20130520.pdf> (2013年5月20日掲載, 2013年6月3日閲覧)
- 総務省 情報通信政策研究所 平成25年 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査 http://www.soumu.go.jp/iicp/chousakenkyu/data/research/survey/telecom/2014/h25mediariyou_1sokuhou.pdf (2014年4

月掲載, 2014年8月5日閲覧)
谷冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造. 教育心理学研究, **49**, 265-273.
辻大介 (2004). 若者の親子・友人関係とアイデンティティ 関西大学社会学部紀要, **35**, 147-159.

吉田俊和・高井次郎・元吉忠寛・五十嵐祐 (2005). インターネット依存および携帯メール依存のメカニズムの検討－認知－行動モデルの観点から 電気通信普及財団研究調査報告書, **20**, 176-183.